

これからの中学校において「伝統的な言語文化」の学習に何が必要か

—小中高のつながりを視野に入れて—

M15EP011

武井 武

1. 研究課題について

(1) 課題設定の動機

ある県の小学校第5学年の児童424人を対象に、文語や古文に関しての意識を調査した結果、「文語文は自分たちが使っている言語と違う」と答えた児童が93%、「古文は読みづらい」と答えた児童は79%だった。(内藤 2010 pp. 3-5)

また、平成25年度「全国学力・学習状況調査」で、「古典は好き」と回答している中学3年生は29%しかなく(文部科学省 2013 p. 12)、東京都の高校生を対象にした調査では、70%以上の生徒が「古典が嫌い」だと感じている。(大元 2014 p. 120)

このような現状の中で、小学校での学習を受け、高校の学習につなげられるように、中学校での古典の学習を充実したものにして、古典に対する関心・意欲を高めることができるような学習指導が必要であると考えた。

(2) 課題設定の背景

現行学習指導要領では、小中高ともに「伝統的な言語文化に関する事項」が新たに設定された。

古典指導の導入となる小学校では、第1・2学年で昔話や神話、伝承などの文章の読み聞かせ、第3・4学年では俳句や短歌の音読や暗唱、第5・6学年では古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ることなどが重視されている。

特に小学校で学習する俳句や和歌、物語や随筆などは、中学・高校にもつながるものである。例えば、第5学年で学習する「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「奥のほそ道」の冒

頭部分は、中学・高校の教科書にも同じものが採用されており、発達段階に応じた指導が求められている。

このようなことから、児童生徒の古典への意識や教材文の特徴などを意識して、各校種の教員がねらいを明確にした指導をすることが、これからの「伝統的な言語文化」の学習には必要になると考える。

2. 研究の目的・方法

この研究の目的は、現行学習指導要領において、中学生に伝統的な言語文化(古典)に対する関心や意欲を高める学習指導を行うには何が必要かを明らかにすることにある。

方法としては、古典の学習指導について調査研究するとともに、山梨県内A市立B中学校において実習を行った。

中学校での実習は、5月から12月まで週1回行った。

5月は担当指導教員の学習指導を参観し、6月から「言葉」・「漢字」・「文法」の学習指導を、11月から12月にかけて、研究に関わる学習指導を行い、実践研究を行った。

以下、研究として行ったことを

- ・調査研究
- ・学習指導実践と分析

の順で示す。

3. 調査研究

中学校の古典指導が、小学校や高校とどのようなつながりがあるか、生徒への聞き取りを行い、生徒が古典を苦手とする理由、古典の学習指導が現状がどのように行われているかを分析した。

(1) 古典指導における小中のつながり

実習校の第1学年の生徒を対象に行われたアンケートでは、古典に対して苦手意識をもつ生徒の割合は43%であった。その中には、古文の音読や暗唱に苦手意識をもつ生徒が多かった。

内藤は小学校での伝統的な言語文化の学習について群馬県の児童・教員双方から意識調査を行った。(内藤 2010 p.7)

その結果、小学校の教員は

- ・小学生にどのレベルまで指導するか
- ・どのような作品を選ぶか
- ・児童の興味や関心を高める方法
- ・評価の方法
- ・教材研究の方法

ということに不安を感じていること、そして、音読や暗唱を最も重視していることが分かった。

音読や暗唱が古典学習に有効なのは確かである。しかし、児童の関心・意欲を高めるための言語活動の工夫や昔の人への共感などがなければ、暗唱や朗読という活動は生徒にとって苦痛が生じることもある。

逆に、例えば枕草子の序段で、四つの季節から好きなものを選び、自分ならその季節のどんなところに良さを感じるかについて、文章を書くような言語活動を経験してきた生徒は、音読や暗唱にも苦手意識をもたない傾向がある。

中学校では、自分が担当する生徒が、小学校でどんな学習をしてきたのかという実態を知った上で、魅力的な言語活動に取り組むことが必要であると考ええる。

(2) 古典指導における中高のつながり

筆者が中学校で国語を担当した生徒が、高校に入学してからの高校での古典の学習について質問したところ、中学校の漢文の返り点の指導が生きている、物語の内容を読むのは楽しいという答えを得ることができた。

しかし、「なぜ古典なんて勉強しなければならないのかわからない。」と答えた生徒もいた。筆者なりの願いをもって古典指導を工夫してきたつもりだが、なぜ古典を学ぶのかという本質的な問いに対する指導が足りなかったと受け止めている。

大元は、従来の古典指導に不満を感じている高校生が、どのような授業を望んでいるのかをアンケート結果から次のように分析している。(大元 2014 p.122) (下線部は筆者による。)

その多くは、「語句や文法だけでなく、内容や人物の思想について、深く考えたり想像したりする授業」「人生において必要なことや、人物のいろいろなものに対する考え方を広げてくれるような授業」「日常でも使えるような、興味をそそる授業」「生徒がもっと参加できる授業」「視覚からも情報が入る授業」であった。

この指摘は中学校の古典の学習指導にも共通していると言えるだろう。中学校学習指導要領解説国語編には、「古典の指導については、言語の歴史や、作品の時代的・文化的背景とも関連付けながら、古典に一層親しむ態度を育成することを重視する」とある。古典を指導する際には、古典の内容や人物について深く考えたり想像したりすることや、人生において必要なことを深く考えられるような、魅力的な言語活動を工夫していくことが必要である。その工夫こそが、中学校での古典の学習を高校へとつなげるために大事なことだと考える。

4. 古典の学習指導実践と分析

(1) 研究に関わる学習指導計画

① 単元名

「心の漢方 ○○堂 ～故事成語を学校生活と結び付けて紹介する～」

②目指す言語能力

故事成語に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くする力

③教材名

「故事から生まれた言葉」

④生徒の実態と故事成語とのかかわり

実習校であるB中学校第1学年の生徒に、故事成語について事前に調査を行った。内容は、10の故事成語とその読み方、意味を提示した上で、以下の4つの質問に回答するというものである。

- ・その故事成語を聞いたり見たりしたことがあるか。
- ・読み方を知っていたか。
- ・その故事成語の使い方（意味）を知っていたか。
- ・話したり、文章を書いたりする時に使ったことがあるか。

集計の結果、「完璧」「油断」は90%以上の生徒が知っており、実際に使用した割合もほとんど変わらなかった。しかし、「推敲」は聞いたり見たりしたことがある生徒が85%であるのに対し、実際に使用したことがある生徒は13%だった。（表1）

このことから「完璧」や「油断」という言葉が日常生活に溶け込んでいて、生徒にとっても使用頻度の高い言葉であることがうかがえる。しかし、「推敲」については、小学校第6学年の「書くこと」の教材で学習用語となっていて、生徒は授業の中で説明は受けていたが、推敲という言葉は抽象度が高く、言葉

と意味が結び付いていないので、自ら使用するまでには至っていないと考えられる。

また、「蛇足」は小学校第3学年の国語科教科書に載っていたが、知っている生徒が52%、使用したことがある生徒は7%と低かった。この調査結果からは、学習した内容が十分定着しているとはいえない状況である。

これらのことから故事成語の知識の定着を図るためにも、日常生活の中で話したり書いたりする時に使えるような学習指導の工夫を講じる必要がある。

⑤指導内容と言語活動

【指導内容】

- (ア) 故事成語がどのようなものかについて知る。
- (イ) 「矛盾」について内容を理解する。
- (ウ) 他の故事成語について調べ、課題に即した紹介文を書く。

【言語活動について】

中国と言えば漢方薬が有名であり、医者はその漢方薬を患者の容体に合わせて微調整をしながら薬を調合していく。漢方は自然の恵みと人の智慧を生かしてできた薬である。故事成語も歴史の恵みやそこに生きた人々の智慧から生まれた、人の生き方に影響を与える薬のようなものではないかと考えた。

そこで、故事成語を薬に、生徒一人一人を医者として、友だちを勇気づけるような故事成語を薬に見立てて、友達に薦める処方箋を書く言語活動を設定した。そして、この処方箋に見立てた文章が、生徒にイメージしやすいように、言語活動のタイトルを「心の漢方

〇〇堂～故事成語を学校生活と結び付けて紹介する～」とした。

表1 故事成語の調査結果

対象	完璧				油断				間一髪				推敲			
項目	見聞	読み	意味	話書												
割合	94%	92%	87%	89%	93%	92%	89%	87%	89%	87%	77%	54%	85%	76%	32%	13%

対象	破天荒				万事休す				登竜門			
項目	見聞	読み	意味	話書	見聞	読み	意味	話書	見聞	読み	意味	話書
割合	66%	61%	42%	20%	65%	52%	42%	23%	52%	49%	21%	10%

対象	蛇足				背水の陣				杜撰			
項目	見聞	読み	意味	話書	見聞	読み	意味	話書	見聞	読み	意味	話書
割合	52%	34%	17%	7%	35%	30%	11%	4%	31%	13%	15%	10%

⑥指導の目標

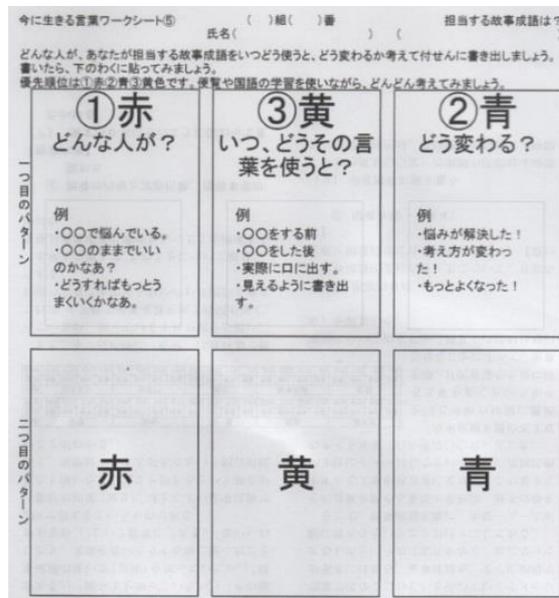
故事成語に表れる考え方について、日常生活と関連付けて自分の考えをもつ。【読むこと 才】

⑦指導計画（表2）

表2 指導計画

次	時	学習活動	評価の手立て
1	1	学習の見通しをもつ。	
	2	故事成語・白文から書き下し文への変化について知る。	学習感想の記述
	3	「矛盾」を音読する。	音読
	4	「矛盾」の故事の内容を表現に即して理解する。	ワークシートの記述
2	5	「どんな場面で『矛盾』という言葉が使うと効果的か」話し合う。	ワークシートの記述
	6	自分の調べたい故事成語を資料を使って選ぶ。	話し合いでの発言 ワークシートの記述
3	7	6で調べた故事成語について「学校生活で、どんな人がどんな場面で使うと効果的か」考える。	ワークシートの記述
	8	グループでそれぞれの考えを発表し、意見交換をする。	話し合いの様子
	9	グループで選んだ故事成語をそれぞれが友達に薦める文章にする。	生徒の文章
	10	書いた文章を読み合い、感想をまとめる。	学習感想の記述

く考えが浮かんだら付け足す」ことができた。また、三色の付箋を項目ごとに使うことにより、思考が明確になった。



資料3 付箋を貼るワークシート

(2)学習指導の振り返り

【3時間目】

①知識の定着から活用へ

教科書にあるような故事から、なぜ「矛盾」という故事成語が生まれたのか、この言葉への古人の思いを想像させた。また、この言葉が使えるように例文を考えさせた。

次に実習校の教育指標「日々に新たに」という故事成語を提示し、身近なところで故事成語が学校生活と結びついていることを確認し、これから自分たちが選ぶ故事成語を日常生活で使えるように意識することを指導した。

②付箋の利用

友だちに薦めたい故事成語を選ばせ、選んだ故事成語について「どんな人が」、「いつ、どのような場面で、その言葉を使うと」「その人が、どういう気持ちに変わるか」ということを色別の付箋に書かせた。(資料3)

付箋は、貼ったりはがしたりするのが容易なので、生徒は気軽に「いろいろと考えを出してきて、おかしいと思ったらはがし、新し

【4時間目】

①付箋の活用

資料3に貼った付箋（各自の考え）をもとに次のような話し合いを行った。(表4)

表4 4時間目の話し合いの流れ

①	話し合う目的、方法を確認する。
②	各自の付箋に書いた内容を発表し、机の上の紙に貼る。
③	付箋について疑問に思うことを聞く。
④	次の点について意見を出し合う。 ・「どんな人に向いているか」を学校生活や普段の生活をもとに具体的に挙げる。 ・その言葉を活用することによって、どのような結果が考えられるか、具体的に挙げる。 ・どのような場面で、その言葉を活用すればいいのか考える。(いつ、どんな場面で)
⑤	誰が「どんな人」に向けて書くのか決める。

各自の付箋を一枚の「アイデア収集シート」に貼ることによって、グループ全員の考えを確認できるようにした。シートを見ながら話し合いを進められるとともに、それぞれの考えに付け加えや手直しを書き込むことが出来るようにした。

②グループでの交流と教師の働きかけ

付箋を活用した話し合いでは、

- ・その考えが故事成語の意味と照らし合わせて相応しいかどうか。
- ・その考えが中学生に向けて書かれたものになっているか。

ということが意識された意見が出されていた。

また、他の人の考えに修正や反対意見を出すときには、国語便覧の記述を根拠として示す姿が見られた。

「切磋琢磨」「備えあれば患いなし」のように、友だちに働きかける例文がなかなか思いつかないグループもあった。そういうグループには、机間巡視で「部活動のこういう場面ではどうかなあ」とより具体的な助言をしたことが、生徒の考えが促進されるきっかけとなった。

③「学習の振り返り」の記述から

学習後の生徒の振り返りの記述を読むと、グループでの話し合いに意欲的に取り組んでいたことがわかる。また、故事成語を日常生活の中で使っていこうという視点や、「故事成語を思い浮かべれば悩みを打ち破るきっかけになる。」と、この言語活動を通して、なぜ故事成語が今に生きているのかという視点をもつ生徒がいた。(表5)

表5 4時間目の学習の振り返りの記述の例

・故事成語を思い浮かべれば悩みを打ち破るきっかけになる。
・人を元気にしたりすることができるんだなあと思った。
・故事成語は人の薬のようなものだと思った。
・故事成語は悩んでいる人など、いろんな人の役に立つことがわかった。
・グループで自分たちの選んだのを話し合えて、いろいろイメージがふくらんだ。

【5時間目】

①シートへの教師のアドバイス

生徒が作文に取り組みやすいように、4時間目終了後に、グループで各自の考えを集めたシート(「アイデア収集シート」)を回収し、筆者がそれぞれのシートにアドバイスを書き込み、生徒がシートを見ながら作文に取り組めるようにした。(表6)

表6 「アイデア収集シート」へのアドバイス例

色	故事成語	付箋の記述	指導言
赤	五十歩百歩	ある人が友達に注意されていたが、次の日にその人が同じことで怒られていて、それを馬鹿にした人	(赤い付せんに対して)こういうことが普段の生活であるかなと考えてみましょう。
赤	切磋琢磨	上を目指す人	中学校生活のどんどこで上を目指しているのかな?
赤	切磋琢磨	ライバルがいる人	〇〇さんはライバルっていうとどんなときを思い出しますか?
黄	備えあれば患いなし	目標の勉強が終わった時	(黄色の付せんに対して)どうするの、もう一回見直すの?余分に勉強してみるのは?
黄	温故知新	人のやっているのを見て、自分もまねして生かす	30年前、中学生だった親に意見を聞くというのはいかがかな。

②作文のひな形の提示

作文のひな形を作ったことで、書くことの負担を減らした。

ひな形は、付箋に書いてあることを、指定された順序に書き込めば文章が完成するようになっている。このひな形を使うことで、作文が苦手な生徒も、付箋を活用して文章を完成することができた。(資料7)

資料7 作文のひな形

③故事成語のとらえ方の課題

K児は学習に積極的に取り組み、グループの話し合い活動でも、グループのアイデアに積極的に自分の考えを発言していた。

しかし、彼は「おすすめする文章」で部活動の例を出しているが、「大器晩成」の意味を正しくつかんで「心の処方箋」を書いているとはいえない（資料8）。

皆さんの中に、部活でレギュラーがとれないで、あきらめて部活をやめたい、そんな人はいませんか。
 そんな人に、私は、「大器晩成」という言葉をおすすめします。
 この言葉は、人物が大成するには時間がかかるという意味です。
 この言葉を試合のメンバー発表で自分の名前が呼ばれなかった時、心でつぶやいてください。
 きっと部活をやめず、レギュラーをとれるようにもっと練習すると思います。

資料8 K児の文章

大器晩成は中学時代にレギュラーを取るといった短い期間のことではなく、もっと長いスパンで人生を捉えたものである。

このような認識のずれを防ぐために以下のような指導が必要であったと考える。

まず、「大器晩成」を言葉として分解し、理解する学習を取り入れることである。

「大器」とは、また「晩成」とはそれぞれどのような意味をもっているのか、その意味をそれぞれ考えさせる。次にどういう故事によりこの言葉に命が吹き込まれたのか、昔の人の思いを想像する。

このように言葉そのものの意味と故事とを結びつけることで、その故事成語に対しての認識が深まると考えられる。

また、学習指導で使用した国語便覧の用例は、「彼は大器晩成の人だ」のように、生徒にとって具体例に欠けていて、生徒が参考にするには十分とはいえなかった。そこで故事成語の用例集を渡しておく必要がある。用例は故事成語辞典から探したり、インターネット上のコーパスを活用したりする。こうすることによって、生徒が選んだ故事成語に対しての概念がずれることを防ぐことができたと考えられる。

【6時間目】

①「心の処方箋」の交流

この時間で、お互いの「おすすめする文章」を読み合った。

「切磋琢磨」を紹介する文章を読んだ生徒が、「お互いに励まし合って、部活の練習がもっといきいきすると思ったから」など、自分の生活にどのように役に立つのか考える生徒が多く、故事成語を学ぶことの意義が大きかったと言える。（表9）

表9 6時間目の話し合いのメモ

切磋琢磨	お互いに励まし合って、部活の練習がもっといきいきすると思った。
百聞は一見にしかず	自分のためになる故事成語だと思った。ぜひ使ってみてみたいと思った。
推敲	自分が効率よく仕事ができるようになり、便利な故事成語でうれしいと思った。
朝三暮四	自分が損しなくなる、便利な故事成語だと思った。慎重になれる故事成語だと思った。
背水の陣	この言葉はスポーツをやっている人は誰でも当てはまることだと思った。
歳月は人を待たず	「勉強しないと」と思わせる言葉。
臥薪嘗胆	この言葉を知っておくと、成功するために我慢できる。

②生徒の振り返り

この時間の学習感想には、

- ・友達と話し合いをすることで、言葉の意味や言葉を覚えることができた。
- ・お互いの故事成語を読むことで考えを広げることができた。
- ・みんなと意見交換をすることで、他の人の意見も聞けるので、相手の考え方がわかる。

とあり、話し合うことで、故事成語についての考えが広がったり深められたりしたと感じる生徒が見られた。

(3)学習指導の成果

「心の漢方 ○○堂」の学習指導を通して、次のような成果が考えられる。

①小学校とのつながり

小学校の学習指導要領では、第3・4学年でことわざや故事成語などの意味を知り使う

ことについて指導することになっている。

また、第5・6学年では、「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方について知ること」を指導することになっている。

今回の学習指導では、小学校での古典の学習指導を発展させたものになっている。

最初に行ったアンケートでは、「推敲」を使ったことがある生徒が13%であった。

しかし、「推敲」を選んだグループは、最後には「国語の時間に、本の紹介カードを作る時、自分の書いたことをみんなに読んでもらいたいと思っている人」に「文章を書き終えて安心しているときに意識するとよい。」という相手を意識した文章を作れるようになった。感想にも「推敲した文章を書くと人から（間違いを）指摘されない。」と書き、今後の日常生活でも使用していくことが期待できる。

このように、小学校での学習と中学校での学習を結びつけて、古典についての関心・意欲を高めることができた。

②高校とのつながり

今回、生徒が選んだ故事成語は高校の教科に採用されているものもある。(例えば「他山の石」「五十歩百歩」「背水の陣」「鶏口牛後」など)

高校では故事について訓読文を使って学習する。中学校で故事成語を薦める文章を書いたり、周りの人の文章を読んだりすることが故事を読む意欲を高めるとともに、故事と意味を結び付けることにつながるのではないかと考える。

③生徒の関心・意欲の高まり

実習校の事前の調査では43%の生徒が「古典は苦手」と答えていた。しかし、今回の学習指導を終えて、生徒の「学習の振り返り」の「まとめ」の記述によると、「学習がつまらなかった」「故事成語に興味がもてない」という記述は見られなかった。

あるクラスの「まとめ」の記述を分類する

と(表10)、「自分のためになるから故事成語を使ってみたい。」という記述と「故事成語にはいろいろあり、それぞれに意味があることが分かった。」と記述を合わせると8割以上にのぼった。

表10 「学習の振り返り」の「まとめ」の記述例

故事成語は心の支えになることがわかった。
故事成語は自分のためになるので、大人になっても思い出してみたい。
故事成語のことをより深く知ることができてよかった。
故事成語にいろんな物語があり、身近なところで自然に使っていた。
先生のアドバイスのおかげでしっかり学ぶことができた。

また、「身近なところで使っていること」に気付いた生徒がいた。

自分のためになると思うことができるようになったのは、「心の漢方 ○○堂」という言語活動によって、「どのような場面で使うとためになるか」という観点で故事成語を調べたり、薦める文章を書いたりして、故事成語の意味を自分の体験やものの見方、考え方に結び付けることができたからだと考える。

故事成語を身近なところで使っていることに気が付くのは、今回の言語活動が日常生活に結び付いたものであり、自分で選んだものを調べ、同じものを調べた者同士で意見を交換したり、複数の故事成語の「おすすめする文章」を読み合ったりすることによって、故事成語をもとに自分の体験を振り返ることができたからだと考えられる。

また、「先生のアドバイスのおかげで故事成語をしっかり学ぶことができた。」と書いた生徒がいた。

言語活動を取り入れた学習指導を行う時に問題になるのは、課題が順調に進む生徒と遅れてしまう生徒が出てくることにある。遅れている生徒に対して、どんなことを難しいと思っているのかということを経験が把握して、指導支援しないと生徒の意欲が低下する。今回、このような記述があるということは、今回の学習指導では、付箋を活用したり、指導や助言を工夫したりした成果が出たといえる

だろう。

5. 今年度の研究のまとめ

現行学習指導要領で、小学校・中学校・高校で「伝統的な言語文化と言語文化に関する事項」が設定され、小学生のうちから、古典の学習を始めている。

そのような現状において、今年度は、児童生徒の古典に対する意識について調査、分析を行った。

その中で、

- ・古典について苦手に思う児童生徒の割合が高いこと。
- ・小学校の教員が「伝統的な言語文化」の学習指導を行うのに不安に感じていること。
- ・高校生が古典の学習に望んでいること。

が明確になった。

これらのことから、中学校において、古典の内容や人物に思いを馳せたり、古典から人生に大切なことを見いだしたりできる、生徒にとって魅力的な言語活動の工夫が必要であることが分かった。

この結果をもとに、古典に対する意欲を高めるために、魅力的な言語活動を取り入れた古典の学習指導を実習校で行い、一定の成果を得た。

以上のことから、生徒の古典への関心・意欲を高めるために、生徒にとって魅力的だと思える言語活動を設定すること、また、小中高の発達段階を考慮した指導の大切さを検証できた。

6. 来年度に向けて

来年度は今年度の反省を生かし、

(1) 小学校・高校とのつながり

(2) 「魅力ある」古典の言語活動づくり

について研究を深め、中学生の関心・意欲を高める「伝統的な言語文化」の学習指導に必要なのは何かさらに探っていきたい。

(1)については、具体的には小学校や高校の学習指導の現状や指導の工夫を確かめるために、小学校や高校の生徒や教員にアンケートをとったり、実際に学習指導の様子を参観したりしていきたい。

このことにより、文献の調査だけではみえない、古典教育全体の課題や、互いに取り入れられる指導方法を見いだすことができると考える。

(2)については、今年度の研究の成果をもとに、年間通しての学習指導、また言語活動の計画を立て、(1)の成果を取り入れながら、実際に学習指導を行い、そこから、伝統的言語文化の学習指導に何が必要か、さらに考察していきたい。

参考引用文献

- ・内藤麗子 (2010) 「小学校国語科『伝統的な言語文化』の指導にかかわる調査研究—伝統的な言語文化に親しむ態度の育成に向けて—」『平成22年度 長期研修員の研究報告書』群馬県総合教育センター <http://www2.gsn.ed.jp/houkoku/2010c/h22gaiyouban/24.pdf> (2016年1月21日閲覧)
- ・中野幸一ほか「古典B」(2015) 桐原書店
- ・中渕正堯 岩崎昇一ほか(2015)「精選国語総合」三省堂
- ・文部科学省(2013)「平成25年度 全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」
- ・大元理絵(2014)「課題解決学習で主体的な読みを可能にする、高等学校古典指導—『竹取物語』をめぐる対話を通して—」東京学芸大学教職大学院『東京学芸大学教職大学院年報』3